

令和7年度 大田区立羽田小学校 自己評価 報告書

令和8年3月24日

○ 本校の概要

児童数257、学級数11、教員数20名、今年度開校122周年を迎える地域に密着した学校である。コミュニティスクールとして、地元の祭りや伝統的な行事への参加をはじめ、干潟観察や町探検など、地域の方々と学校が一体となって子どもたちの健全育成に取り組んでいる。また、羽田空港に最も近い学校であり、総合的な学習の時間を用いたバリアフリーの学習やキャリア教育、空港イベントへの参加等、空港と日常的に連携を図り、学校教育に生かしている。また、東京都人権尊重教育推進校としての歴史は長く、近隣の高齢者団体や幼・保育園、食肉市場の方々との交流を通して、都の人権課題について積極的に学習に取り組んでいる。このように、本校は「地域力と国際都市おた」の実践に意欲的に取り組み、「人権尊重教育」に力を注いでいる学校である。また、学力向上においては、ICT教育の研究校として、ICTを活用した教育の充実を図ると共に、言語能力の育成のためにNIE教育やMIMの学習に力を入れている。

○ 自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	方向性	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標	成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄		
								評価	人数	コメント
生予個 き測別 る困目 力難標 をな1 育未成 来し社 会を 創造的 に	社会の様々な課題を自分事として捉え、主体的に考え、他者と協働し、問題解決していく意欲や、予測困難な未来社会を切り拓いていくために重要な創造力や課題解決力、情報活用能力を育成します。	①STEAM教育等の教科等横断的な学びや科学教育を推進し、課題解決力や新たな価値を創造する力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	保護者アンケートの「教員は、子どもに考えさせたり表現させたりする授業を積極的にやっている。」の項目に、「そう思う」だけ「いたいそう思う」と回答した保護者の割合。	4: 90%以上	【これまでの取組】 ・STEAM教育や3Dプリンター、ICTについての研修を行い、教員で新しい表現方法のあり方について共通理解した。 ・低学年では、町探検やお店見学、中学年では、地域の消防団や羽田空港と連携した学習など、地域の特色を生かした学習内容に取り組んできた。座学のみではなく、実物を実際に見たり、触れたりする活動を通して、表現しやすくなる授業計画を立てた。 ・区の研究指定を受け、各学年でICTの活用を積極的に行った。2月のICT研究発表に向けて、各学年の発達段階に合わせて、表現の方法を広げていき、自身が最も表現したいものを選ぶ授業作りを行った。また、編道月・火の朝の帯時間を使い、ICTタイムを設け、タイピングに取り組んだ。 ・高学年の教科「おたの未来づくり」では、昨年度の実践を活かし、1年間を通して、1つのテーマに取り組むことで、自分たちがテーマに対し、どのようにアプローチをし、表現するかをじっくり話し合う時間を増やした。その結果、より深く自分事として考えられるようになった。  【今後の改善策】 ・授業の流れを明確にし、児童が考えやすくなる問題づくり、個人・グループ・全体を上手に使い分けの自力解決の設定、自分たちの考えを「伝わりやすさ」を大切に、ICTなどを使って表現させる時間の確保を学習スタンダードとして立ち上げる。また、そのような授業作りができるように年間を通してOJTを設け、授業力の向上を図る。 ・教科「おたの未来づくり」では、協力していただく企業やお店を検討し、持続可能な羽田の未来づくりを行う授業計画を作成する。	A	3	学校公開等で隣同士でのペア学習やグループ学習に取り組む姿が多く見られた。また、座学だけでなく、実際に見たり触れたりする体験的な学習も積極的に導入している。子どもたちも、学校での学びを地域や実社会で活かそうとすることが評価できる。  一方、STEAM教育の推進については専門家の助言など学校外の知見を大いに活用できる環境が整備されることが望まれる。教員の経歴や地域の特性などによる格差が生じる懸念があり、より外部との連携が必要とを感じる。また、学校教育に関しての保護者へのさらなる理解や周知が必要である。アンケート項目では「よく分からない」と回答する割合が多く、学校での取組が保護者に伝わるような成果物や行程を伝える工夫が必要である。しかし、保護者自身が教職員の努力を知る必要もあると考える。保護者には、学習に関する事柄については教職員を信頼し、親として家庭教育に責任をもち、相互に感謝の気持ちをもち、協働して学校教育にあるべきである。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3: 80%以上				
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2: 70%以上				
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1: 70%未満				
お世個 お界別 と目 をつ標 担な2 うが 材国 を際育 都成市 します	英語での実践的なコミュニケーション能力を高めるとともに、我が国や郷土の伝統文化に触れ、尊重する心や、協力していく態度を育成します。また、国際社会・地域社会に関心をもち、持続可能な社会を形成していく態度を形成します。	①外国語教育指導員の活用などにより、英語に慣れ親しみながら会話をする機会を増やし、英語力やコミュニケーション能力の向上、豊かな国際感覚の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	児童アンケート「羽田の地域学習は楽しいですか」	4: 85%以上	【これまでの取組】 ・ALTと連携して全学年の学習を進めてきた。さらに、4～6年生に対してより英語に慣れ親しむ機会の確保として、休み時間にはイングリッシュカフェを開き、簡単なゲームや会話を通した活動を行った。 ・東京都人権尊重教育推進校として校内研究に取り組んできた。「自分も相手も大切にしている言語能力を育成するための指導の工夫」を研究主題として、MIM・NIE教育・教科「おたの未来づくり」・STEAM教育の充実を図った。さらに、ICTを活用し友達の意見を見られる場を作り、様々な考えに触れる機会を設けた。 ・町探検、羽田空港のバリアフリーから学ぶ学習、インクルーシブデザイン、町のお店のタイアップ授業など各学年で地域の特色を活かした学習に取り組んできた。  【今後の改善策】 ・来年度は各教科や特別活動においてSDGsについての取組を充実させていく。 ・地域と連携を図り、祭り学習や町探検、町のバリアフリーの学習などを継続して行っていく。 ・羽田空港に近いという立地を活かし、「国際都市おた」として、羽田空港との連携を密にし、国際感覚を養っていく。	A	4	空港に隣接していることや伝統的な祭りが今も続いているなどの羽田の地域の特色を生かし、多様な取組が行われている。児童もそれに対して積極的に取り組み、楽しんでいる様子が見られる。英語に親しみ好きになることや学習に楽しく臨めることで中学校でのつまずきがなくなると思う。教員も、東京都の人権尊重教育推進校として、長い間校内研究に取り組む、さらにICTやNIEなど多岐にわたる取組を教員一人ひとりが方向性を見誤ることなく、確実に成果につながる取組をされていることを評価する。  一方、外部の要請に応えるだけを主とせず、子どもの実情に応じた優先順位をつけて取り組むことを。また、小中連携において羽田中学校のOGCルームを羽田小学校も活用させてもらい、英語でのコミュニケーションを楽しむ機会を増やしてほしい。さらに、道德地区公開講座のように、人権教育に関しても保護者や地域も交えた取組を行い、児童・保護者・地域・教員を交えて学ぶ機会があるとよいと思う。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3: 80%以上				
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2: 70%以上				
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1: 70%未満				
た一個 め人別 のひ目 基と標 礎り3 がな個 る性力 とを能 育力成 をを力 成をを 力成を をを力 成をを 力成を	児童・生徒が豊かな人生を生きていく上で基礎となる力として、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成します。また、乳幼児期から中学校までの一貫性のある教育を推進します。	②現代社会における地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて考え、行動する力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	自尊感情アンケートの「自分のことを大切に思える」の項目に、「思う」「どちらかというと思う」と回答した児童の割合。	4: 80%以上	【これまでの取組】 ・年に3回の道徳研修の実施、道徳授業地区公開講座での授業公開を行い、教員の道徳教育の指導力向上を図っている。また、講師を招き、講演会に児童も参加することで道徳心の育成を図った。 ・算数において、全学年がレディネステストを行うことで、習熟度を測り、それに合わせたクラス編成を行った。習熟度に合わせた授業の計画を検討したことで、全ての児童に基礎・基本的学力の定着が図れる授業づくりを行うことができた。また、ICTを取り入れ、個に応じた課題の取り組み方を提示し、学習支援につなげた。 ・体育発表会、一校一取組（短縄、持久走、長縄）、体育の授業を通して健やかな体の育成をした。 ・学期に1回以上の養護教諭による講話、早寝早起き朝ごはんカードによる健康教育の推進を図ってきた。  【今後の改善策】 ・今後も少人数指導、放課後補習によるきめ細かな指導を行い、児童の習熟度を上げていく。また、授業の流れや板書などを教員間で共通認識をもち授業に当たることで、児童がどの先生の授業でも系統性を感じ安心して学習に取り組める環境を整える。 ・体力テストの結果を分析し、児童の実態に合った健康教育を進めていく。	A	5	学校が地域住民や保護者との連携を深めながら道徳教育を進め、授業公開や意見交換を通して理解を広げてきたと感じる。また、児童の実態を踏まえた指導改善がICTの活用によって進み、習熟度に応じた個別最適な学びが実現しつつある点も評価する。これらの取組により、児童の学力や学習態度には着実な成果が見られ、基礎・基本を育てる工夫や郷土の伝統文化を尊重する学習、相手を理解しようとする態度の育成など、多方面で教育効果が表れている。  一方、課題としては、道徳教育や地域連携の取組をさらに継続・強化していく必要がある。ICT活用や個別最適化の取組もまた発展途上であり、より意識的・意図的な継続が求められる。また、少人数指導や系統的な授業改善についてもさらなる成果を期待する。授業の中で子どもと大人が一緒に課題を考える場面を増やす必要性がある。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3: 70%以上				
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2: 60%以上				
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1: 60%未満				
た一個 め人別 のひ目 基と標 礎り3 がな個 る性力 とを能 育力成 をを力 成をを 力成を	児童・生徒が豊かな人生を生きていく上で基礎となる力として、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成します。また、乳幼児期から中学校までの一貫性のある教育を推進します。	③体育や保健体育の授業など様々な機会を通して、健康教育や食育を推進し、基本的な生活習慣の確立を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	自尊感情アンケートの「自分のことを大切に思える」の項目に、「思う」「どちらかというと思う」と回答した児童の割合。	4: 80%以上	【これまでの取組】 ・年に3回の道徳研修の実施、道徳授業地区公開講座での授業公開を行い、教員の道徳教育の指導力向上を図っている。また、講師を招き、講演会に児童も参加することで道徳心の育成を図った。 ・算数において、全学年がレディネステストを行うことで、習熟度を測り、それに合わせたクラス編成を行った。習熟度に合わせた授業の計画を検討したことで、全ての児童に基礎・基本的学力の定着が図れる授業づくりを行うことができた。また、ICTを取り入れ、個に応じた課題の取り組み方を提示し、学習支援につなげた。 ・体育発表会、一校一取組（短縄、持久走、長縄）、体育の授業を通して健やかな体の育成をした。 ・学期に1回以上の養護教諭による講話、早寝早起き朝ごはんカードによる健康教育の推進を図ってきた。  【今後の改善策】 ・今後も少人数指導、放課後補習によるきめ細かな指導を行い、児童の習熟度を上げていく。また、授業の流れや板書などを教員間で共通認識をもち授業に当たることで、児童がどの先生の授業でも系統性を感じ安心して学習に取り組める環境を整える。 ・体力テストの結果を分析し、児童の実態に合った健康教育を進めていく。	A	5	学校が地域住民や保護者との連携を深めながら道徳教育を進め、授業公開や意見交換を通して理解を広げてきたと感じる。また、児童の実態を踏まえた指導改善がICTの活用によって進み、習熟度に応じた個別最適な学びが実現しつつある点も評価する。これらの取組により、児童の学力や学習態度には着実な成果が見られ、基礎・基本を育てる工夫や郷土の伝統文化を尊重する学習、相手を理解しようとする態度の育成など、多方面で教育効果が表れている。  一方、課題としては、道徳教育や地域連携の取組をさらに継続・強化していく必要がある。ICT活用や個別最適化の取組もまた発展途上であり、より意識的・意図的な継続が求められる。また、少人数指導や系統的な授業改善についてもさらなる成果を期待する。授業の中で子どもと大人が一緒に課題を考える場面を増やす必要性がある。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3: 70%以上				
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2: 60%以上				
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1: 60%未満				
た一個 め人別 のひ目 基と標 礎り3 がな個 る性力 とを能 育力成 をを力 成をを 力成を	児童・生徒が豊かな人生を生きていく上で基礎となる力として、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成します。また、乳幼児期から中学校までの一貫性のある教育を推進します。	④羽田空港や地域の祭りなど、羽田の地域の特色を活かした取組を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	自尊感情アンケートの「自分のことを大切に思える」の項目に、「思う」「どちらかというと思う」と回答した児童の割合。	4: 80%以上	【これまでの取組】 ・年に3回の道徳研修の実施、道徳授業地区公開講座での授業公開を行い、教員の道徳教育の指導力向上を図っている。また、講師を招き、講演会に児童も参加することで道徳心の育成を図った。 ・算数において、全学年がレディネステストを行うことで、習熟度を測り、それに合わせたクラス編成を行った。習熟度に合わせた授業の計画を検討したことで、全ての児童に基礎・基本的学力の定着が図れる授業づくりを行うことができた。また、ICTを取り入れ、個に応じた課題の取り組み方を提示し、学習支援につなげた。 ・体育発表会、一校一取組（短縄、持久走、長縄）、体育の授業を通して健やかな体の育成をした。 ・学期に1回以上の養護教諭による講話、早寝早起き朝ごはんカードによる健康教育の推進を図ってきた。  【今後の改善策】 ・今後も少人数指導、放課後補習によるきめ細かな指導を行い、児童の習熟度を上げていく。また、授業の流れや板書などを教員間で共通認識をもち授業に当たることで、児童がどの先生の授業でも系統性を感じ安心して学習に取り組める環境を整える。 ・体力テストの結果を分析し、児童の実態に合った健康教育を進めていく。	A	5	学校が地域住民や保護者との連携を深めながら道徳教育を進め、授業公開や意見交換を通して理解を広げてきたと感じる。また、児童の実態を踏まえた指導改善がICTの活用によって進み、習熟度に応じた個別最適な学びが実現しつつある点も評価する。これらの取組により、児童の学力や学習態度には着実な成果が見られ、基礎・基本を育てる工夫や郷土の伝統文化を尊重する学習、相手を理解しようとする態度の育成など、多方面で教育効果が表れている。  一方、課題としては、道徳教育や地域連携の取組をさらに継続・強化していく必要がある。ICT活用や個別最適化の取組もまた発展途上であり、より意識的・意図的な継続が求められる。また、少人数指導や系統的な授業改善についてもさらなる成果を期待する。授業の中で子どもと大人が一緒に課題を考える場面を増やす必要性がある。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3: 70%以上				
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2: 60%以上				
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1: 60%未満				
た一個 め人別 のひ目 基と標 礎り3 がな個 る性力 とを能 育力成 をを力 成をを 力成を	児童・生徒が豊かな人生を生きていく上で基礎となる力として、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成します。また、乳幼児期から中学校までの一貫性のある教育を推進します。	④乳幼児期から中学校まで円滑な接続を行うため、保幼小の連携や小中一貫の視点に立った教育を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	自尊感情アンケートの「自分のことを大切に思える」の項目に、「思う」「どちらかというと思う」と回答した児童の割合。	4: 80%以上	【これまでの取組】 ・年に3回の道徳研修の実施、道徳授業地区公開講座での授業公開を行い、教員の道徳教育の指導力向上を図っている。また、講師を招き、講演会に児童も参加することで道徳心の育成を図った。 ・算数において、全学年がレディネステストを行うことで、習熟度を測り、それに合わせたクラス編成を行った。習熟度に合わせた授業の計画を検討したことで、全ての児童に基礎・基本的学力の定着が図れる授業づくりを行うことができた。また、ICTを取り入れ、個に応じた課題の取り組み方を提示し、学習支援につなげた。 ・体育発表会、一校一取組（短縄、持久走、長縄）、体育の授業を通して健やかな体の育成をした。 ・学期に1回以上の養護教諭による講話、早寝早起き朝ごはんカードによる健康教育の推進を図ってきた。  【今後の改善策】 ・今後も少人数指導、放課後補習によるきめ細かな指導を行い、児童の習熟度を上げていく。また、授業の流れや板書などを教員間で共通認識をもち授業に当たることで、児童がどの先生の授業でも系統性を感じ安心して学習に取り組める環境を整える。 ・体力テストの結果を分析し、児童の実態に合った健康教育を進めていく。	A	5	学校が地域住民や保護者との連携を深めながら道徳教育を進め、授業公開や意見交換を通して理解を広げてきたと感じる。また、児童の実態を踏まえた指導改善がICTの活用によって進み、習熟度に応じた個別最適な学びが実現しつつある点も評価する。これらの取組により、児童の学力や学習態度には着実な成果が見られ、基礎・基本を育てる工夫や郷土の伝統文化を尊重する学習、相手を理解しようとする態度の育成など、多方面で教育効果が表れている。  一方、課題としては、道徳教育や地域連携の取組をさらに継続・強化していく必要がある。ICT活用や個別最適化の取組もまた発展途上であり、より意識的・意図的な継続が求められる。また、少人数指導や系統的な授業改善についてもさらなる成果を期待する。授業の中で子どもと大人が一緒に課題を考える場面を増やす必要性がある。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3: 70%以上				
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2: 60%以上				
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1: 60%未満				

学 校 別 力 目 ・ 教 師 力 を 向 上 さ せ ま す	校内研究等のOJTの充実を通して、教師の授業力を向上させます。また、質の高い教育を実現するため、学校の組織的な運営力を向上させます。あわせて、教師がやりがいをもって働くことができる魅力的な環境づくりを進めます。	①児童・生徒一人ひとりの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の視点による授業改善を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	自己申告書の「4. 能力開発(OJT、研究・研修、自己啓発)」の今年度の目標に対して、自己評価が「B」以上となった教員の割合。	4:90%以上	【今までの取組】 ・学期に1回以上の授業観察、若手教員の授業力向上研修、各教科のOJT研修などを通して、教員の授業力向上を図った。 ・校務分掌などの適切な人員配置により、教員それぞれの専門性を活かした教育活動に取り組んできた。 ・スクールサポートHANEDA、教員支援員により教職員の業務軽減を図った。 【今後の改善策】 ・羽田小学習スタンダードを作成し、授業力の向上を目指していく。 ・校務分掌の人員配置の見直し、行事や業務内容を精査することで、業務適正化に取り組んでいく。	A	5	教員の授業力向上やウェルビーイングの改善、子どもが支援を前向きに受け止める場面の増加、そして教員一人ひとりの努力が適切に評価される仕組みづくりなど、学校全体で進められている取組は着実に成果を上げている。OJT研修の導入によって授業改善のモニタリングが進み、自己評価を教員間で共有しやすい環境が整いつつあり、こうした取組は保護者や地域からも高く評価されている。また、児童の学習会や活動の様子を記録し、保護者や地域と連携して支援を広げようとする姿勢も見られ、学校と地域が協力して子どもを支える体制が強化されつつある。 一方で、小規模校特有の課題として、担任任せになりやすい状況があり、学年全体でチームとして対応する体制づくりが求められている。また、保護者や地域への協力依頼が十分に仕組み化されていない点や、児童の頑張りや授業での良い取組を十分に伝えきれていない場面も課題として残っている。これらの点を改善することで、学校全体の取組がさらに充実し、子どもたちにとってより良い学習環境が整っていくことが期待される。
		②教職員がそれぞれの専門性を生かしたり、地域の特徴を生かしたりして教育活動を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			3:80%以上				
		③教職員の業務適正化等に取り組み、児童・生徒に教員が向き合う時間を確保する等、ウェルビーイングを高める取組を行っている。	4:「おおむね高まっている」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 1:「おおむね高まっている」と回答した教員が60%未満であった。			2:70%以上				
						1:70%未満				
た 自 個 別 の 目 学 し 標 び く 5 を い 支 き 援 い き と す 生 き る	困難のある児童・生徒一人ひとりの状況にあわせて教育環境を整えるとともに、相談機能の充実を図ることで、すべての児童・生徒が自分らしくいきいきと生きるための学びを支援します。	①インクルーシブ教育システムの構築に向けて、教員の資質・能力の向上や校内における支援体制の充実、特別支援教室巡回指導教員との連携等を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	いじめアンケートの項目「学校は楽しいですか」の項目に、「楽しい」と回答した児童の割合。	4:85%以上	【今までの取組】 ・1・2年、3・4年、5・6年で学年団を設定し、学年団会を定期的に開き、情報の共有や対応の確認などを行うことで、どのようなことも共有し、組織的に対応できるような体制を組んだ。 ・校内特別支援委員会、生活指導委員会などを定期的に行い、学校全体で共通理解を図り、特別な支援やいじめ防止・早期発見に取り組んだ。 ・巡回指導教員と連携しフィードバックをもとに支援を進めた。 ・人権尊重教育推進校として校内研究で「自他ともに認め合える指導の工夫」をすることで、いじめ未然防止に取り組んだ。 ・教員全体で児童の「あいさつ」への意識向上を行い、人とのよいコミュニケーションを図るよう促した。 ・スクールカウンセラーなどと連携して、児童、保護者が相談しやすい環境を整備した。 【今後の対策】 ・今後も、日頃の報告、連絡、相談、記録を徹底し、適切に保護者、各機関と連携していく。 ・特別な支援が必要な児童について、校内特別支援委員会にて情報共有し、一貫した指導を続けていく。	A	3	学校では、いじめ防止や特別支援に関する情報共有が適切に行われ、保護者との協力関係も築かれていることから、児童の安心につながる体制が整いつつある。また、教職員の研修が定期的に行われ、若手を中心に意識の定着が進んでいるほか、支援員の関わりによって支援が必要な児童に寄り添う姿勢が校内で共有されている点も評価できる。さらに、地域との協働や文化活動の必要性が認識され、児童の自己肯定感や自尊心に関する分析からも、学校生活が肯定的な意識形成に寄与している。 一方で、これらの取組は一定の成果を上げているものの、報告・連絡・相談・記録の徹底や関係機関との連携強化など、体制の継続的な改善が求められている。インクルーシブ教育の導入や地域協働の体制づくりもまだ十分とは言えず、社会的ニーズの高まりに応じた迅速な対応が必要とされている。また、児童の意識調査の分析基準や活用方法についても整理が不十分で、より精度の高い評価体制の構築が課題として残されている。
		②学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見、早期対応等のための組織的な対応を実施している。	4:「組織的な対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満の教員が回答した。 2:60%以上80%未満の教員が回答した。 1:「組織的な対応ができた」と回答した教員が60%未満であった。			3:80%以上				
		③スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携等、児童・生徒・保護者が相談しやすい環境を整備し、一人ひとりの能力や可能性を最大限に伸ばすことを意図した指導や支援を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			2:70%以上				
						1:70%未満				
安 柔 個 心 軟 別 な で 目 教 創 標 育 造 6 環 境 を 学 ぶ 空 間 と 安 全 ・	学校施設について、ICT環境等の教育環境を整備を推進するとともに、児童・生徒の安全・安心を向上させるための教育を推進します。	①学校や地域の伝統・特色や、安心・安全な学校生活づくりを踏まえて、学習環境を整備している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	羽小防災の日の保護者アンケート「学校は災害に対する教育を関係機関と連携しながら進めている」の項目に、「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した保護者の割合。	4:90%以上	【今までの取組】 ・教室掲示・表示の統一、月1回の安全点検を継続して行い、教室環境を整備した。 ・学習者用端末の活用を推進し、教員のICT活用能力向上のためにOJT研修を学期に2回行った。 ・避難訓練、羽田防災の日(地域連携防災体験)、安全指導日を実施して、災害に対する知識や技能の定着を図った。 【今後の対策】 ・ユニバーサルデザインの観点から、教室掲示などを見直ししていく。 ・今後も、避難訓練などを通して災害に備える意識を高めていく。 ・ICTを活用した授業の充実を図る。 ・10月に、昨年度から始まった羽田防災の日は、たてわり班での活動として学年を超えて協力しながら防災について学ぶ機会となった。来年度以降も継続して行えるよう、関係諸機関と継続的に連絡を取り合っていく。	A	6	学校では、「防災の日」の取組が年々工夫され、児童や保護者が積極的に参加する体制が整えられてきたことにより、防災意識の向上や安全点検・備蓄品の研究など、地域と協力した実践が進んでいる点が評価できる。また、避難訓練では学校を超えた地域の協力が得られ、貴重な経験となっていることから、こうした活動が児童の安心につながっている。 一方で、防災活動をさらに充実させるためには、取組の改善点を継続的に見直し、保護者会や地域との連携をより強化する必要がある。また新しいアイデアやICT活用を含めた長期的な視点での検討が求められる。
		②避難訓練や安全指導日などを通して、危険や災害に対する教育を関係機関と連携しながら進めている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			3:80%以上				
						2:70%以上				
						1:70%未満				
学 地 学 個 校 域 校 別 を コ ・ 目 つ ミ 家 標 く ユ 庭 7 リ ニ ・ ま テ 地 域 の 核 連 と 携 し ・ て 協 働 の 働 き よ る	地域コミュニティの核としての学校づくりや地域の特色を生かした学校づくりを進めるとともに、学校・家庭・地域が連携・協働して、地域社会全体で子どもたちを育成します。	①「地域コミュニティの核としての学校づくり」を目指して地域と学校が連携・協働した様々な活動を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	保護者アンケート「学校は地域の力を子どもたちの教育活動に活かしている」の項目に、「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した保護者の割合。	4:90%以上	【今までの取組】 ・保護者アンケートや学校運営協議会から出された成果、課題を活かして教育活動を進めた。 ・月に一回、各学年の様子を掲載するなど教育活動を適宜ホームページに載せ、情報を発信した。 【今後の対策】 ・保護者アンケートや学校運営協議会での成果と課題を教員内で共有し、来年度の教育活動をよりよいものにするよう、検討を行う。 ・今後もホームページ更新を定期的に行い、校内の教育活動を周知していく。 ・スクールサポートHANEDAや保護者への協力を仰ぎ、地域、家庭、学校で一体となって子どもたちを育てていく。	A	6	学校が地域と連携しながら防災活動や話し合い活動を進めている点が評価できる。防災訓練や町会長との懇談、ホームページ更新による情報発信など、地域に根ざした取組が充実していることが良い点である。また、学年を超えて参加しやすい話し合いの工夫や、生活上の不安や課題を共有し解決策を探る活動が重視され、反対意見を受け止めながら考えを深める姿勢が育まれている点も評価できる。 一方で、これらの取組をさらに効果的にするためには、参加方法の工夫や話し合いの質の向上を継続的に図る必要があり、地域協働の体制づくりについてもより強化が求められる。こうした良い点と課題を踏まえると、学校と地域が協力しながら、児童が社会参画への意識を高められる環境づくりを継続していくことが重要である。
		②登下校の見守り活動等の、児童・生徒の健全育成や安全指導に係る取組を地域の協力により実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			3:80%以上				
		③家庭教育に関する情報の発信やPTAなどと連携した講演会・学習会、またはその双方を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			2:70%以上				
						1:70%未満				

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。

○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめる。

○学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である B:自己評価はおおむね適切である C:自己評価は適切ではない D:評価は不可能である の4点について、評価した人数を記載す